



東日本大震災義捐金の募金と拠出先の検討について

3月11日、マグニチュード9.0を記録する未曾有の大地震とそれに続く大津波が東北地方の太平洋側4県と関東地方の茨城、千葉の両県を襲い25,000人を超える死者並びに行方不明者を出す大惨事となり、全半壊の家屋は170,000を超えました。その経済的損失は16-25兆円と見込まれています。その上、想定を超える津波に襲われた福島第一原発の事故は原子炉を破壊し、漏出する放射性物質は広範囲に飛散し、チェルノブイリ原発事故に次ぐ大きな被害をもたらすこととなりました。実はこの時、キワニスアジア太平洋地区年次総会がマレーシアのマラッカ市で開催されており、川崎日本地区ガバナー、伊藤東京クラブ会長ほか多数の日本地区の会員が参加しておりました。その会場でこの被災を聞くこととなり全員驚くとともに、直ぐ様、家族の安否確認の為に携帯などで日本に電話しても一向にかからず、最終的に確認できるまでに相当な時間を費やすことになりました。このニュースは出席していた他国からの会員にも即座に伝わることとなりましたが、驚くことに早速、義捐金の募集が開始され、集まったお金はその場で川崎ガバナーに手渡されました。キワニスの仲間たちの手際の良い温かい志に大変感動いたしました。我々東京クラブでも、参加者が帰国し

て早々、日本地区並びに日本財団の呼びかけもあり、募金を開始することになりました。その結果、多数の会員並びに会員が代表者の企業そして会員の家族・縁者から暖かい寄付の申し出があり総額577万円を超える義捐金が集まりました。この贈り先ですが、全て日本財団を通して然るべき機関、団体に寄付される事になっています。その寄付先の選定に関しては地区、財団がプロジェクトチームを立ち上げて、最も被災地の子ども達の為になることは何かという視点で検討が進む予定です。一方、東京クラブとしては過去積み立てたメルシー基金や5月27日に開催されたファミリーデーの収益金をやはり被災地の子ども達のために有効に使うことを別途検討しています。被災地では大津波により漁業が壊滅的打撃を受け、多くの水産専門高等学校も大きな被害を受けていることから将来の漁業を担う若者を応援するために奨学金・支援金を拠出するという支援策が検討されています。最後に会員各位の暖かい志に心より感謝申し上げます。なお、日本地区全体としては5月末の時点で海外のクラブからの寄付を含めて3092万円の義捐金が寄せられています。

(事務局長 吉田 浩二)

仙台クラブ・福島クラブ訪問報告 2011.5.22~23 6.2

3月11日の東日本大震災発生の後、皆さん、被災された方々に対して、「私たちができることは何か？」を問いかけ続けていらっしゃると思います。皆様からの温かい義捐金を、本当に被災地に役立つ支援として活かしたいと、日本地区川崎ガバナーが、支援プロジェクトを選定する委員会が設置されることになり、私が委員長を務めさせていただくことになりました。そこで、被災地の現状をよりよく理解したいと思い、キワニス日本財団佐藤理事長が仙台クラブ、福島クラブを訪問されると伺い、同行させていただきました。

1. 仙台クラブ訪問 5月22日23日

5月22日日曜日夕方、丹野会長をはじめとする7名

の仙台クラブの皆様とおめにかかり、日本財団に寄せられた義捐金の活用方法について、意見交換を行いました。仙台クラブは、今年設立40周年を迎えることもあり、震災で被害を受けた子ども達のために支援活動を行うこと、その内容などお話を伺い、今後の日本地区のプロジェクト選定の参考にさせていただくことにいたしました。

翌日、5月23日月曜日、丹野会長、我妻事務局長が同行して下さり、被災地を訪問することができました。まず向かったのは志津川町。震災直後から志津川病院の映像がよく登場していました。志津川町へ向かう高速道路はすでに整備されており、約2時間のドラ

イブで志津川町に到着。海から志津川病院まで、本当にすべてが失われ、ところどころに瓦礫がまとめられていて、人影といえば、いまだに捜索を行っている警察官のみという光景に、あらためて、津波の瞬間的な恐ろしい魔力を実感しました。ここに人々が戻ってくるのか、またにぎやかな浜の営みが戻ってくるのか、暗澹とした気持ちになりました。その後、仙台市近郊の七ヶ浜を訪れました。ここでも、密集した住宅地の土台だけが残っていて、小さな事務所の上にまだ撤去されずに残っている漁船の姿が胸を打ちました。

2. 福島クラブ訪問 6月2日

福島クラブの和合会長は、5月14日のキワニスドール・シンポジウムに参加され、避難所の子ども達についてお話しされていました。そこで、6月2日福島クラブの例会にお伺いしたとき、避難所の子ども達にキワニスドールをお届けしたいとお願いしました。

福島クラブの例会では、会員の皆様から原発の影響と福島経済活動への影響など、いろいろお話を伺うことができました。例会後、福島総合運動場の避難所へ、和合会長、事務局の涌井さまのご案内で、キワニスドール90個を持って子ども達が学校からもどってくる3時半～4時の時間帯に合わせて伺いました。

運動場アリーナの一階のロビーに並べた机にドールとマーカーをならべ、館内放送で「お人形に絵をかきましょう」と誘いましたら、さっそく小さな子供たちが集まり、見本のお人形を見ながら顔を書き出すと、付近にいた大人も集まり、皆さん楽しそうに「マイドール」を作ってくださいました。こちらの避難所は原発からの避難で、ご自分の家が失われたわけではなく、期限の



わからない避難所生活に心身ともに疲労されている様子です。孫にドールを上げるという女性からは、「この頃、家族の会話がなかったので、人形作りをみんなですること、家族が一つになれたらうれしい」と言われ、少しでもお役にたてれば良いと思いました。

仙台・福島を訪問し、この災害からの復興は本当に長い時間が必要なこと、そして、私たちは継続的に被災者を支援し続けなければいけないことを強く認識してまいりました。

(副会長 堀井 紀壬子)

国際キワニスASPAC大会(マラッカ大会)報告 2011. 3. 10～12



3月10日から12日までマレーシアの有名な海峡に面した古都マラッカで国際キワニスアジア太平洋地域(ASPAC)の第36回大会が開催されました。参加者数は前年の台北大会にはやや及ばないものの、日本地区からの56名を含み総勢702名に達し、盛大な大会になりました。

●規約改正

例年本大会の主要議題は次期役員選挙ですが、今回はそれに加えて特別に大きなテーマがありました。即ち、かねてからASPACを東京キワニスクラブの様に法人格を有する組織に発展させ(The Association of Kiwanis Clubs Asia-Pacificに改称)、銀行口座開設(例えばシンガポールなどに)容易化等に資することが検

討されてきましたが、今大会でニュージーランド南太平洋地区がそのための規約改正を正式に提案したのです。これを大会初日のASPAC諮問委員会、役員会で賛成多数で可決し、最終日の総会の議題として提案されました。

ところが審議の後の採決では多数の代議員を擁する台湾地区等の同意が得られず、賛成票が可決に必要な投票総数の3分の2に達しませんでした。

従って、法人化及びそれに伴う資金管理、会計監査等の規約改正問題は振り出しに戻り、今後更に議論を重ねて行くことになりました。

●役員改選

次期役員選挙に関しましては、各役職への立候補者数が定員と同数になったため、全員当選となりました。

新しい布陣は次の通りです。

- ・議長(Chairman) : Adeline Chan (マレーシア)
- ・次期議長(Chairman-elect) :

Boy Valencia (フィリピン)

- ・副議長 (Vice Chairman) : 小田忠雄 (日本)
- ・ASPAC 代表国際理事 (Trustee) :
Lee Kuan Yong (マレーシア)

●今後の大会開催地

来年はスリランカのコロンボで3月15～17日に開催することが確認されました。その翌年には広島に於いて日本地区の当番で開催される予定です(3月7日～9日、リーガロイヤルホテル)。広島クラブでは今大会に多数参加されるなど既にその準備に取り掛かっております。

●夕食会での義捐金募金

3月11日の開会式最中に東日本大震災のニュースが入り、その夜の夕食会では各国の参加者から日本人に対し温かいお見舞いの言葉が寄せられるとともに、主催者の計らいでチャリティ・ボックスが廻され、集まった24万円相当額の各国紙幣が川崎ガバナーに手渡されました。

●懇親晚餐会でのパフォーマンス

総会終了後の晚餐会では各地区がお国ぶりのパ

フォーマンスを披露するのが通例ですが、今回日本地区からは「津波



等により被災した地域の早期復興を祈念しつつ」との口上に続けて女性参加者の踊りを中心に全員で「大漁唄い込み」を合唱し、盛大な拍手を浴びました。

なお、奉仕活動の展示コンペでは、ドール製作現場の写真や広島大会関係PR資料を展示した日本地区が第2位のawardを受賞しました。東京クラブにも大変ご協力頂き、厚くお礼申し上げます。

(国際キワニス日本地区事務総長 秋山 誠一)

第3回 キワニスドール・シンポジウム レポート 2011. 5. 14



キワニス・ワンデーの行事として、東京キワニスクラブでは横浜、埼玉キワニスクラブと共催で5月14日「第3回キワニスドール・シンポジウム」を東京都港区北青山 伊藤忠商事株式会社本社10階会議室で開催しました。参加人員は199名で東京クラブ関係が60%、横浜クラブ関係が10%、埼玉クラブ関係が20%強でした。

シンポジウムの結果はアンケートの結果報告が適切かと思えます。アンケートの回答数は80名でした。キワニスクラブ会員・家族は30名、一般の方が50名でそのうち医療職場からは19名、学校の先生・学生が15名です。またこれまでキワニスドールを全く知らなかったが始めて参加した方が11名でした。

シンポジウムの感想で大変よかった51名、よかった20名でした。

今回のシンポジウムのポイントは1、基調講演では全般的な小児科医療とキワニスドールのつなぎを紹介したい。2、今まで病院のこどもの患者さんに送って利用されてきましたがもっと広げたいと、障害児関係、児童教育で躰、他人に対する思いやりの指導に活用している事例を紹介したい。3、双方向交流を期した意見交換会の3点でした。

始めに基調講演として東京大学大学院五十嵐教授から「小児医療の問題点とキワニスドール」のテーマでのスピーチをいただきました。日本のこどものおかれていた環境、問題点についてわれわれの知りえない貴重な現況が紹介され、特に親御さんとの関わりが大きいと聞かされ考えさせられました。

次に4人の講師からキワニスドールの活用状況についてスピーチがありました

医療現場から台東区立台東病院風間看護師長、さいたま赤十字病院松永看護師 障害児支援現場から帝京平成大学赫田講師、児童教育の現場から東京都立品川特別支援学校宮島コーディネーターから障害児低学年児童での活用で成果が挙げられている例が紹介され、また、飛び入りで風間さんから震災現場に赴き子どもとドールで交流し大変喜ばれた事例が画面で紹介されました。

アンケートでも障害児、児童教育の話がよかった、素晴らしかったと◎をつけて戴いた方が29名もありました。震災現場の話でも大変感銘を受けたとのことで





した。私どもができるテーマがここにあると感じさせられました。

3番目には今回の企画で是非成功させたかった異分野の方達の双方向交流でした。小グループで忌憚のない話し合いでお互いの置かれている立場、相手の立場の



理解が進みドールの発展に是非つなげたい意見交換会です。

皆さんがテーブルについてくれるか、話しが進むかの心配が全くの杞憂でどのテーブルもワイワイガヤガヤの活発そのもの、まとめの発表でも看護師、学生、一般ボランティア、年齢も幅広く、しっかりした発表で拍手喝采でした。アンケートでもよかったとの声が多かった。後継者の育成にもつながる大きな期待が持てる意見交換会でした。

シンポジウム終了後キワニスドールの綿詰め体験をしていただきました。約100名が参加し103個の素晴らしいドールができました。27名の方がこれからも是非ドールを作りたいとの希望が寄せられ裾野を広げようとの目的も達成したのではないかと思います。

(第3回キワニスドール・シンポジウム実行委員長 星 利樹)

平成 23 年ファミリーデー 2011. 5. 27

今年のキワニスファミリーデーは「頑張れ被災地の子どもたち」というサブテーマを掲げ、5月27日(金)午後5時半から東京丸の内の銀行倶楽部で開催されました。

当日は東京地方に梅雨入り宣言が出され小雨模様のあいにくのお天気でしたが、ご家族を含めて96名の方々が参加されました。伊藤会長のごあいさつのもと、川崎ガバナーからヒクソン・フェロー*の表彰があり、堀井副会長の乾杯の音頭で和やかな宴が始まりました。

お食事を楽しみながらの歓談のあと、アトラクションの部では、最初に津軽三味線の若手女性ナンバーワン奏者・はなわ ちえさんが登場。迫力ある演奏に思わず拍手の波が起り、アンコールの民謡メドレーでは美声を披露する方も出て会場は大いに盛り上がりまし



た。続いて東京アマチュアマジシャンズクラブ名誉会員の川崎利秋会員によるマジックショー。玄人はだしの鮮やかな手さ

ばきに皆さんびっくり。会場の小さなお子さんたちもお手伝いに参加して、心温まるマジックを披露していただきました。

が当たるとあって当選番号が発表されるごとに会場からは惜しかった、

もうちょっとなのにといった声があちこちから聞かれました。和気あいあいのうちに予定の時刻となり実行委員会からのお礼の挨拶をもってお開きとなりました。

当日のバザーの売上、ご寄付、福引券の売り上げ等の合計額は851千円に上りました。被災地の子ども達の支援のための支出にあてる予定です。なお当日は開会にさきだってキワニスドールづくりの会を開催、多くの会員の皆様が参加され40個のドールが出来上がりました。

*ヒクソン・フェローとは

国際キワニス初代会長を記念した国際キワニス財団(KIF)の募金活動の一つで、1,000ドルを寄付するとヒクソン・フェローとなり、楯、メダル、ピンが贈られます。更に1,000ドルの寄付を重ねると、ダイヤモンドフェローとなります。ダイヤモンドフェローは何度でも寄付することができます。キワニス日本財団(KJF)が設立されてからは、KIFとアグリーメントを結び、KIFの承認を得た上で、日本地区で使用できるようになりました。その第1号が今回の東日本大震災で被災した岩手県、宮城県、福島県の子どものために贈られました。(事業企画委員長 塚越 孝三)



新入会員、行事参加の感想など

● 靖国神社「慰霊の泉」 献納記念参拝に参加して 2011. 3. 29

今年の桜は何色だろう。昨日3月28日東京で桜が開花したと発表された。

その東京の桜の開花基準となる標本木があるのが、今日、東京キワニスクラブのメンバーが参集している靖国神社だ。

東日本大震災、平成23年は日本人にとって忘れられない年となる。

東日本の太平洋岸を襲った、高さ30メートルにも及ぶ津波を伴う地震は、直接的被害と共に、副産物としていつ終わるとも知れない原子力災害をもたらした。

連日、情報の収集分析が出来ず、一貫した方針も無く、要時要点を見極める事も出来ない対応がなされている、と言った報道がなされている。

「情報収集は敵情判断の基礎にして、適切なる敵情判断は情報収集を容易にす」「一貫せる方針を確立し、大なる機動力を発揮して要時要点に徹底的に兵力を集結」「全般の状況に通暁し、事に臨み冷静、熟慮するを要す。然れども、いたづらに判断の正鵠を得ることに腐心して機宜を誤らんよりは、むしろ毅然としてこれを断ずるに努むるを要す」これらは、ここ靖国神社に関係が深い、旧陸軍で使用された「統帥参考」「統帥綱領」に書かれている文章である。英霊たちには、攻め来る敵もない事故処理に苦慮している我々の有様がどの様に映っているのだろうか。

震災前だが、放射線照射による農作物の品種改良がテレビで紹介されていた。植物の種子に放射線をあて、遺伝子を変化させて品種改良を試みるものだが、素材がどの様に変化するかは、一か八かやってみなければ判らないといった実験だと記憶している。

靖国の桜はどうなるのだろうか、梢で咲いて会おうと約束して散った人々は会えるのだろうか、与えられた平和を謳歌する我々が、もう一度この国をお守り下さいとお願いしてもいいのだろうか。

昇殿参拝、会社が九段という事も有り、朝、中門鳥居の所で軽く一礼して出社している。

たまにお賽銭を持ってお参りしに行くのが、私にとっての正式参拝なのだが、今回は一つも二つも格上の正式参拝であり、初めての経験だ。

神職の案内で、手水をとり、拝殿、到着殿、本殿に囲まれた廊下を歩く。侘び寂びの世界でもない、何とも表現しがたい真っ白な異空間に入り込んだようだ。

修祓、お祓いを受けて心身共に清めて本殿に上がる。本殿の風格であろうか、同じ回廊だが懐かしき板張りの廊下に暖かな光を感じる。

伊藤会長が神前に玉串を捧げる。参加者一同合わせて拝礼。

本殿を下り、廊下でお神酒をいただく。緊張で見えていなかった中庭を、ようやく眺める事が出来た。斎戒が解かれたと言った状態なのだろうか、直会が回廊を出た後であったら、本殿前の空間は真っ白な空間のままだったに違いない。

参集殿に戻りコートを着用し、恒例の「慰霊の泉」での記念撮影へと向かう。

能楽堂前の標本木には、肌寒く原発問題で気が滅入る日々の中、なるほど数輪の桜が咲いている。

花の都の靖国神社も、夜間のライトアップ、酒宴を自粛し、露天商の出店も取りやめにしたと参集殿で報告を受けている。

英霊たちは寂しがらるだろうか、それとも安堵しているのだろうか。

微笑ましく見守っていた花見の宴も、年月が移ろい、世代が代わり、昼かと思間違うばかりに照らし出された酒宴が催される今では、眉をひそめていたのかも知れない。

月明かりで見る靖国の桜は何色なのだろうか。決して暗くない、本当の美しさが解るだろう。人は少し立ち止まる時かも知れない。

記念撮影に参加したキワニアンは、明日の子どもたちの為に祈ったに違いない。

桜が桜色でありますように。山が笑ってくれますように。(会員 竹嶋 一久)



● 新入会員オリエンテーションに参加して 2011. 2. 23

2月23日(水)に恒例の東京キワニスクラブ新入会員オリエンテーションが西新橋のクラブLで行われました。

事前に「オリエンテーションと云っても堅苦しい事はなく、ほとんど飲み会だから気楽に来てください。」とのお誘いでしたがメンバーシップ委員長の藤原さんはもちろん伊藤会長を初め、副会長と各委員会の委員長の皆さんが出席され、今期の新入会員を温かく迎えて下さいました。出席人数25名と懇親を深めるには程良い数で伊藤会長のご挨拶に続いて各委員長から委員会の活動内容のご説明がありました。子ども達のボランティア活動、国際問題の講師を招いての研鑽、美術館見学などの文化活動、囲碁やゴルフなどのレクリエーション等々キワニスクラブの幅広い活動を知ることが出来、又そのエネルギッシュな活躍に感銘を受けました。まさに「楽しい仲間で社会貢献」が実践されていると実感しました。

その後は各委員長と新入会員がそれぞれのテーブルに分かれて飲み会ムードが盛り上がり懇親を深める事が出来ました。

このオリエンテーションに先立ちボランティア活動委員長の松本さんのご指導の下キワニスドールをつくる会がありました。一番簡単そうな綿を詰める工程をやりましたが、これが意外に簡単ではなく、頭の部分に一生懸命詰めすぎると他の部分がスカスカになってしまったり皆さん約一時間汗をかきました。

3月11日の大震災の前の事なのでもう随分時間がたったような気がしますが、このオリエンテーションのお陰でキワニスクラブが身近になったと思います。(会員 金井 義邦)



● キワニスドール作成講習会に参加して 2011. 4. 4～5



4月4日、5日の二日間、東京キワニスクラブ事務所においてドール作成の講習会が開かれました。

会員の方々にドール作りに親んでもらうとともに、良い作品を作る基本を身につけ、それを広めるようにすることが目的だったと思います。

私もこれまで何回か「作る会」に参加し、綿詰め作業のお手伝いしてまいりましたが、今回の講習では、型取り、切断、ミシン、アイロン、綿詰め、かぎの工程を一貫して経験させてもらい、各工程の肝となる部分を少しばかり会得することが出来ました。

ただ、何よりも印象に残ったのは、そこで交わされた先輩諸氏との会話が、けして難しい技術論などではなく、「心をこめて」、「使う人の気持ちになって」、「一

つひとつ」、「丁寧に」などというごく普通の言葉だったことです。

人間とは不思議なもので多くの人達と作業をしますと、どうしても人より速く、人より沢山という競争心のようなものが沸いてきますし、時には作品の上に自分の個性を表現したいというような誘惑にも駆られるわけですが、それでは良い仕事はなかなかできないようです。

時間をかけて細心に気配りしながらも結果的には使う側の自由な要求にこたえられるシンプルな美しさ、それを何気なく作り出すことが出来れば、「悟りが開けた」ということには

なるのではないのでしょうか。そんなことも考えさせられた講習会でした。(会員 中村 禎良)



▲4月15日例会後ドールをつくる会を開催しました。

【報告】 ASPAC 各地区幹部研修

5月14、15の両日中国のマカオでキワニス国際ナショナルによるアジア太平洋地域の各地区のガバナー、次期ガバナー、ELIMINATE推進責任者等を招集してELIMINATEを如何に推進していくか、またクラブ新設、会員増強を如何に計っていくか等につい

2011. 5. 14～15

での研修会が開かれました。

筆者はクラブ新設・会員増強のリーダーとして参加させていただくこととなりましたが、研修内容・討論の内容については日本地区からの報告に譲って研修会雰囲気或いは会場となったマカオの現状について簡単に

報告します。

マカオに行くには勿論直行便もありますが、香港経由で約1時間高速フェリーに乗って行くのが一般的のようです。マカオは古くからのポルトガルの植民地であり1999年に中国に返還されてからは一国二制度の下、香港と同様比較的自由的な経済制度が維持されています。主たる産業は観光とカジノで、観光地としては古いポルトガル統治時代の町並みが歴史的世界遺産としてユネスコに登録され多くの観光客を惹きつけています。昨今、カジノつきリゾートホテル業の発展は著しく、売上高ではかの有名なラスベガスを既に抜いており、新しいカジノつきホテルの建設ラッシュが続いています。

研修が催されたのはザ・ベネチアンというリゾートホテルで複雑な建物の中に運河が三筋切れられゴンドラを浮かべてイタリアのベニスに趣が演出されています。この運河に沿って世界の有名店やレストランが軒を並べていて、ホテルの外に出ずに何でも用が足せるような街全体を呑み込んだ巨大ホテルといえましょう。ここで丸2日間の研修が午前9時から午後5時まで続けられました。

主眼は勿論ELIMINATEに於いて目標どおりの1100万ドルを如何に達成していくかと、そのためにクラブの新設とメンバー数の増大を如何に図っていくかです。色々なイベントを企画し人の耳目を引くとか政府要人を引き込むとか様々な意見が出されました。

クラブの新設に関しては色々タイプの違いを認めることによって会費を安くし仲間に引きえるのはどうか、PTAの連合組織とタイアップしてK-クラブを推進すべきだとか色々な意見が出されました。

実は日本は別としてアジア太平洋地域はキワニスインターナショナルで最もクラブ数と会員数が増加している地域ですから、会員増強に関しては問題の少ない地域といえます。ヨーロッパも会員数はそこそこ伸びているようですが、地域内の主導権争いが顕在化しており問題の地域のようなのです。

最も問題なのはご本家米国自体のようでキワニス活動の趣旨が飽きられたのかクラブ数も会員数も減少に歯止めがかかっていないようです。こうした実情はやはり本部の幹部や地域の幹部を直接話し合ってみないと分からないことですし、逆に日本の状況を正しく理解してもらうためにも彼らに十分説明することが必要であると肌で感じた次第です。とても良い経験をさせていただきました。

(事務局長 吉田 浩二)



▲5月14日マカオでのNZ義捐金への証書贈呈。

～最近の広報活動（新聞、雑誌、テレビなど）～



● 国際キワニス本部機関紙 (2011年4月号) に 第2回キワニスドール・シンポジウムの様子が掲載 2011.4

昨年4月17日に開催されたキワニスドール・シンポジウムの様子が国際本部機関紙に掲載されました。

キワニスドールがどのように医療現場で活用され、不安な気持ちを抱えている子供の癒しに役立っていることはもちろん、シンポジウムに参加した医師、看護師、小児医療の関係者、キワニス会員やドールを作っている学生、ボランティアの人たちが大勢参加した様子が写真入りで大きく紹介されました。

シンポジウム終了後のドールをつくる会の締結の模様も複数の写真が掲載されていますが、最年少の幼児がドール作りに精を出している姿を大きく掲載してお



り、印象的です。

キワニスドール・シンポジウムのことがキワニス本部の機関紙に紹介されたのは初めてのことであり、大きな関心をもって見られているということだと認識できると思います。

(広報委員長 古屋 俊彦)



● 第3回キワニスドール・シンポジウムが新聞に掲載 2011. 5. 14 5. 25

5月14日に開催されたキワニスドール・シンポジウムの様子が翌日の埼玉新聞と産経新聞神奈川版およびMSN・産経ニュースに紹介されました。

それぞれ「子どもを励ます不思議な力<医療現場、避難所でも活躍>」（埼玉新聞）、「キワニスドール普及目指しシンポ<闘病中の子どもの支えに>」（MSN・産経ニュース）という見出しで記事が掲載され、人形を医療機関に寄贈するキワニスクラブ会員や医療関係者など200人が参加し、病院や障害児支援での活用例や東日本大震災で被災した子ども達への活用の例も紹介されるなどの例も検討されたとして当日の様子を写真入りで掲載されました。



（広報委員長 古屋 俊彦）



● キワニスドールがテレビに登場 2011. 4. 26

4月26日(火) 22時からフジテレビのドラマ「グッドライフ」にキワニスドールが登場しました。これは、キワニスドール・シンポジウム等でご参加いただいている国立成育医療研究センターチャイルドライフスペシャリストの相吉様が助監督に推奨されたことで実現したものです。

（広報委員長 古屋 俊彦）

● 「小児看護（4月号）」に北里大学病院でのキワニスドールの活用の詳細が掲載 2011. 4

「小児看護」は小児看護の領域、関係の方々には一番読まれている雑誌ですが、4月号に北里大学の学生ボランティア「ぬいぐるみ病院部」の活動が紹介されました。

数年前に立ち上げられ、現在は100名を超える団体ですが、ぬいぐるみを患者に見立てて、学生が医師役・薬剤師役をそれぞれ担当し、子どもたちがぬいぐるみの保護役という設定で行う、いわゆるお医者さんごっこのほか、保健教育、食育、小児病棟でのChild Doctor Hospital (CDH)の活動などを行っています。

Child Doctor Hospital (CDH)の活動は入院中の子どもを対象とした活動で、看護師、ぬいぐるみの保護者の役を学生が行い、看護師役の学生は医師役の子どもをサポートします。

この活動にキワニスドール

ルが活用されているわけですが、CDHの目的である

- ①医療を怖いという対象ではなく、自分にとっての味方であるという認識が持てる



- ②実際の医療器具に触れることで医療に対する親しみを感ぜられる
 - ③入院中は受け身になりがちな子どもたちが、医療に主体的にかかわることができる
 - ④子どもたちが楽しい時間を過ごせる
- これらの目的に有効に活用されている様子が子供の

反応（保護者に声）を含めて写真入で詳細に紹介されました。

北里大学看護学部の内藤茂幸様からその部分を別刷りにしてお送りいただきました。

ご関心の方は事務局にありますのでご覧ください。
(広報委員長 古屋 俊彦)

ELIMINATE

Kiwanis eliminating maternal/neonatal tetanus



ELIMINAE プロジェクトの検討・推進状況について

国際キワニス は ELIMINATE プロジェクト（母子破傷風撲滅活動）を着々と進めています。

まず、プロジェクト推進の推進組織として ELIMINATE キャンペーン国際委員会を立ち上げました。委員長は元国際理事で米国テキサス州の Greater North Houston Club の Randy DeLay、日本からは当クラブの横山太蔵会員（前地区事務総長）が委員として指名され、日本、韓国、フィリピン地域のコーディネーターを勤めることになりました。また各地区毎に置かれるキャンペーン推進の責任者（地区コーディネーター）として日本地区は当クラブの北里光司郎会員（前当クラブ会長、破傷風菌培養の世界最初の成功者、北里柴三郎博士の御縁者）が選ばれています。

さらに国際キワニスは来る7月のジュネーブでの世界大会を本キャンペーンの正式開始の機会としたいとしていますが、既に“Lead Gifts”（一口10万米ドル以上の大口寄付者）、モデルクラブ（会員一人当たり750米ドル以上の募金をするクラブ）、100Kクラブ（10万米ドル以上の募金をするクラブ）の募集を始めています。

また、本キャンペーンでも独自の表彰制度が計画されており、その中心となるものとして、Walter Zeller 賞（Fellowship）が考えられています。これは国際キワニス財団発足時に貢献あったカナダの Walter

Zeller 会員を記念して本キャンペーンにおいて一口1250米ドルの寄付をした者に与えられるものです。2口以上の寄付者には口数に応じたダイヤモンド・ピンを襟章に着けることが許されます。（Walter Zeller は、1939年当時国際キワニス財団が発足しても資金難で実質的な活動ができていなかったとき、25枚の1ドル銀貨を寄付し、これがオークションで625米ドルで売れ、この資金を元に財団は実質的活動を開始することが出来たという故事にちなんで命名）なお、これまで通り Hixson Fellow、Tablet of Honor 等による顕彰を選ぶことも出来るとしています。

ELIMINATE キャンペーンは国際的にはこのように着々と進められていますが、日本ではこの間に東日本大震災に見舞われ、日本の各キワニスクラブはその対応に追われている現状です。海外からも多くのお見舞い、激励の言葉や義援金が寄せられています。このような状況下、われわれは本キャンペーンに本格的に取り組むことが困難となっています。この辺の事情は去る5月にマカオで行なわれたアジア太平洋地域の地区役員研修会で、川崎日本地区ガバナーから発言され、大方の理解を得ていると考えられます。勿論時至ればフル回転でキャンペーンに取り組むことも付言されています。

今後の予定

- キワニスドールをつくる会（田園調布学園）（2011.6.18）
- 第43回キワニス社会公益賞贈呈式（2011.7.1）
- 国際キワニス年次総会ジュネーブ大会（2011.7.5～7）
- サマーパーティ（2011.7.28）
- キワニスドールをつくる会（目黒星美学園）（2011.8.25）
- 国際キワニス日本地区年次総会千葉大会（2011.9.9～11）
- 青少年教育賞表彰式・講演会（2011.9.17）

キワニスドールの使い方

キワニスドール（キワニスクラブで製作した人形）は、病院で若い患者さんに、これからどんな治療をしていくのか説明するときなどにも使われます。傷口の縫合や、酸素マスクを使用しなければならないような場合、お子さんは驚き緊張して怯えてしまいますが、キワニスドールを使って説明されると、これから受ける治療の内容がよく判って、怖さや不安が軽減されるそうです。

子ども達はキワニスドールに注射をしたり、時にはお医者さん・看護師さんに教えて貰いながら手術の真似をしたりして、キワニスドール相手の「ごっこ」遊びをしています。人形を身代わりにこれから受ける

治療を体験させると、子ども達の恐怖が和らぎ、治療を受け入れやすくなるそうです。

キワニスドールが真っ白でノッペラボウなのは、子ども達が好きな色を塗り、顔や洋服を描いて遊ぶことができるように、という工夫をしているからです。大人でも病院は厭な所です。病気の子供達にとってはなお更です。治療は苦痛を伴いますし、見知らぬ環境におかれて子ども達は怯えています。

キワニスドールは、痛くて怖い外来での治療や入院生活を少しでも楽しくできたという、特別な玩具なのです。

キワニスドールの報道とPR活動

日本地区で初めて、東京キワニスクラブでスタートしたキワニスドールは、2003年にNHKラジオで全国放送され、また雑誌では、日本フィランソロピー協会の機関誌や、2004年には診断と治療社の「チャイルドヘルス」12月号、2006年3月に医療関係専門誌「メディカル朝日」2006年3月号にも掲載されました。

2005年3月20日、「キワニスドール」が読売新聞で紹介され、全国の読者から大きな反響がありました。また、2005年8月27日、キワニスドールが1時間の番組として、BS朝日から全国に放映されました。この放映番組を基に20分間にダイジェストしたPR版を制作し、また、2006年から2008年まで日本小

児科学会や日本小児保健学会でキワニスドールを紹介し、キワニスドールの普及活動に力を入れています。2009年4月4日にはキワニスドールシンポジウムを東芝本社39F会議室にて250名の参加を得て開催、ドールをつくる喜び、看護師、医師、看護教育の立場からドールの使い方の報告があり、現場の生の声を聞く機会を得ました。このときの様子を約16分のダイジェスト版DVDにして、希望の方に差し上げています。キワニスドールの活動は東京キワニスクラブのホームページでも紹介しています。第2回は、2010年4月、第3回は2011年5月14日伊藤忠商事10F会議室で開催、約200名が参加しました。

<http://www.japankiwanis.or.jp/tokyo>

キワニスクラブとは

キワニスクラブは、“世界の子どもたちのために”を合言葉に奉仕活動を行う民間の世界的な団体です。1990年からは、特に幼い子どもたちのための奉仕活動に力を入れています。名称のキワニスは、デトロイト周辺に住んでいたアメリカ原住民の言葉“Num-Kee-Wan-is”（みんな一緒に集まる）に由来します。

キワニスクラブは、1915年1月21日米国デトロイト市で生まれました。当初はアメリカとカナダで発展していましたが、1963年にはヨーロッパ3都市に広がり、現在世界の約90ヶ国、8,000のクラブ、約60万人の会員が国際キワニスを構成し、その本部は米国インディアナポリスにあります。

日本では、東京キワニスクラブが1964年1月24日、アジア太平洋地域で最初のクラブとして設立されました。次いで名古屋、大阪、広島、神戸、仙台、

札幌、横浜、高松、福岡、京都、千葉、和歌山、新潟、泉州、埼玉、西宮、渋谷、福山、熊本、静岡、金沢、松江、鹿児島、芦屋、福島、大分、千代田の順に生まれ、現在28のクラブで会員は約1,600名で活動しています。東京キワニスクラブは、1967年2月27日社会奉仕団体として初めて、厚生大臣より社団法人の認可を受けました。

キワニスドールは、メルボルンのナナワディング・キワニスクラブで、1988年に初めて作られました。メルボルンからオーストラリア全域で広がり、さらに1994年に北欧にも伝播しました。日本地区では2001年11月から取り組み始めました。現在では全世界のキワニスクラブでドールを制作して病院などに寄贈するという活動を行っております。

社団法人 東京キワニスクラブ 会長 伊藤 康成 〒101-0047 千代田区内神田2-3-2 米山ビル

Tel: 03-5256-4567 Fax: 03-5256-0080 e-mail: tokyokiwanis@japankiwanis.or.jp URL: <http://www.japankiwanis.or.jp/tokyo>